■：個人論文

# ハイネとイギリス
## ——「イギリス断章」について——

藤　澤　正　明

### 0. はじめに

軽妙さと辛辣さを併せ持つ機知の詩人ハイネは旅の詩人でもあった。ドイツ以外ではポーランド、イタリア、イギリスへ旅し、フランスに移住し生涯を終えた。これらの経験から散文作品群「ポーランドについて」、「イギリス断章」、「ミュンヒェンからジェノヴァへの旅」、「ルッカの温泉」、「ルッカの町」や「フランスの状態」等が誕生した。

ハイネがイギリスへの旅行を行ったのは1827年の4月から8月までの約4か月である[1)]。同じく4か月に及ぶイタリア旅行の前年のことであり、後半生を過すことになるフランス移住（1831年5月）の4年前である。

1827年のイギリス旅行に基づいて書かれた「イギリス断章」には「美しい婦人への愛」と並んでハイネの生涯を貫く「フランス革命への愛」(7-239)[2)] が鮮明に表現されている。

フランス革命を支持しナポレオンに好意的なハイネにとって、イギリスは自由の国であるとともに革命フランスに敵対した国でもあり、イギリス旅行はハイネの見聞を広め、歴史や社会に関する考察を豊かなものにした。

「イギリス断章」の基本的性格については既に前稿「フリードリヒ・エンゲルスと詩人ハイネ」[3)] で取り扱ったので、本稿ではイギリスに関心を持ったハイネ以外の作家や芸術家の記述も取り上げながら、ハイネとイギリスの関係を具体的な地名や場所に即してより詳しく明らかにし、作品理解を進めることにする。

18世紀後半にはリヒテンベルクとモーリッツがイギリス旅行を行った。共にフランス革命前のことである。リヒテンベルクは1770年に最初のイギリス旅行をし、モーリッツには『あるドイツ人による1782年のイギリス旅行』がある。

19世紀になるとハイネ同様20年代にヴェーバーとメンデルスゾーンがイギリスを訪問した。ヴェーバーは1826年3月にパリからカレーを経てドーヴァーに渡りロンドン入りしたが、6月に客死した。メンデルスゾーンは1829年4月にロンドンに到着し、スコットランドへも足を延ばしている。

ハイネ以後では30年代にグリルパルツァーがイギリス旅行を行った。40年代にはヴェールトがイギリスへ渡り、フォンターネも最初の訪問をしている。

なお、1830年10月に晩年のゲーテを訪問したことのあるイギリスの作家サッカレー(1811-63) は『虚栄の市』の中で1810年代、20年代のイギリスやヨーロッパの社会状況を描いており、本稿にとって有益な材料を提供している。また、時代は新しくなるが、夏目漱石にも「倫敦塔」がある。

### 1. テムズ川航行

「イギリス断章」は『旅の絵』補巻（第4巻）に収録され1831年に出版されたが、その中で詩人としてのハイネを体現している「私」は蒸気船でテムズ川を溯ってロンドンへ向かった。第1章「テムズ川上での会話」には船上での「黄

色い男」との意味深い会話、航行する船舶によるテムズ川の賑わい、夕暮れ時のグリニッジ病院やロンドン塔の眺め等が描かれている。

第1章は、「テムズ川の緑の岸を目にし、私の心の隅々で小夜啼鳥が目を覚ましたとき、黄色い男が甲板の上で私の横に立っていた」(3-416) という表現で始まる。「自由の国よ」、「人間の胸のすべての力は今や自由への愛となる」とイギリスを訪れた「私」の感激が吐露される一方で、傍らに立つ「黄色い男」は「若い熱狂家よ」(3-417)、「あなたはあなたの捜しているものを見つけることができないでしょう」と醒めた対応をし、二人の会話が進行する。

自由への憧れ、自由の重要性はハイネに先んじてパリを訪れ、やがて移住する年長の評論家ベルネも認識しており、20年代に「自由は人生と芸術において最も素晴らしいもの、最高のものである」[4] と記している。

作品冒頭で既に「私」はテムズ川の船上であり、作品構成上不要なそれまでの経路は描かれていない。そこで参考までに他の作家等の経路やその様子を見ておくと、リヒテンベルクは、最初のロンドン訪問 (1770年4月着) の際には「海上で2日と2夜」過し、「前帆が破れ、大抵の船員たちが船酔い」する嵐の中に「8時間以上」いる経験をし、ハリッジの港に投錨した[5]。1826年3月にカレーからドーヴァーへ渡ったヴェーバーは、雨天と風には悩まされたが、航行時間は「とても幸運なことに3時間」[6] で済んだ。1829年4月にロンドンに着いたメンデルスゾーンは「船の一行全員が船酔い」する嵐に見舞われ、「私たちの航行はすばらしいものではなく、とても長かった」と記した[7]。1836年5月にヴェーバーと同様パリを経てイギリスへ向かったグリルパルツァーは、ブーローニュからロンドンへの「12時間の船旅」[8] を選び、ハイネと同じくセーヌ川を溯った。1840年代のフォンターネの旅にはテムズ川を溯る行程が具体的な地名で、「最初のイギリスの、テムズ川口に位置する町」[9] シアネスから順に、グレーヴズエンド、ウリッジ、ブラックウォール、グリニッジと記されている。

黄色い男との会話が進むうちに日没時になり、船上からはグリニッジ病院が見えてくる。この「印象的な宮殿のような建物」は元来「二つの翼」から成り、「間の空間」が空いていて、「可愛らしい小城を冠した森の緑の山」を見せてくれた (3-421)。

フォンターネの表現を借りれば、グリニッジは「病院と天文台によって全世界に知られている」[10]。

船によるテムズ川の混雑は一層激しくなり、「私」は「これらの大きな乗り物がいかに巧みに互いに身をかわすか」に驚嘆した (3-421)。前稿でも取り上げたように、テムズ川の賑わいをエンゲルスは「絶えずテムズ川を覆う数千の船」[11] と表現している。

サッカレーの『虚栄の市』第62章には、「私」とは逆にロンドンからオランダへ向かう蒸気船の乗客たちのセーヌ川上での様子やグリニッジを通過する頃のフランス人侍女の船酔い[12] についての記述がある。しかし、関心の所在の違い故に「イギリス断章」には船上の乗客たちの具体的な様子は、黄色い男やすれ違う船の乗客たち同士の挨拶の交換を除いてほとんど記されていない。

なお、「驚くべき数の船」によるセーヌ川の混雑や危険を避けるため「ロンドンからまだ16マイルある」ダートフォード付近で上陸し[13]、陸路を取ってロンドン入りするモーリッツの『あるドイツ人による1782年のイギリス旅行』には、グリニッジからロンドンまでの街道の賑わいが「ベルリンの一番人の多い通りよりもはるかに賑やかであった」[14] と記されている。

「黄色い男」と「私」の会話は他の乗客の「塔だ!」という叫び声によって断ち切られた。一

行が見たのは、「霧に覆われたロンドンの中から、不気味に暗い夢のように立ち現れた高い建物」(3-421) である。

1840年代の最初の訪問に続き、50年代にイギリスを訪れたときのフォンターネの場合にもロンドン塔は「不気味な灰色で」立っていた[15]。なお、40年代のフォンターネはロンドン塔を「有名であるのと同じくらい趣味が悪い」[16] と記している。

時代はずっと後になるが、1900年（明治33年）のロンドン到着直後に夏目漱石もロンドン塔を訪れている。「私」は船上からロンドン塔を眺めたが、漱石は対岸から「塔橋（とうきょう）」を渡ってロンドン塔を見物した。漱石の説明によれば「この建築を俗に塔と称（とな）えているが塔というは単に名前のみで実は幾多（いくた）の櫓（やぐら）から成り立つ大きな地城（じしろ）である」[17]。

## 2. ハイネとイギリス

1825年3月の手紙でハイネは、「イギリス断章」以前の作品である「ハールツの旅」(『旅の絵』第1巻所収) の中に「自然描写、機知、ポエジー」と並べて「ワシントン・アーヴィング流の観察」の存在を認めている (8-181)。ハイネが親近感を感じたそのアーヴィングによれば、イギリスの魅力は田舎にあり、大都会だけでもってイギリスについて判断を下すことは危険である。『スケッチブック』中の「イギリスの田舎生活」には、「イギリス人の性格について正しい意見」を形成しようと思う外来者は「観察を中心都市に限ってはならない」、「田舎へ出かけなければならない」[18] と記されている。

もちろんハイネは4か月間ロンドンだけに滞在した訳ではない。ブライトン、マーゲイト、ラムズゲイトにも出かけた。ブライトンは新婚夫婦ジョージとアミーリアが訪れるサッカレーの『虚栄の市』の舞台の一つであり、「一方には張り出し窓、他方には青い海」という「美しい眺め」[19] を提供している。フォンターネによるとロンドン・ブライトン間は50英マイルであった[20]。しかし、ブライトンも作中には登場せず、「イギリス断章」が扱うイギリスはテムズ川の船上を除いては主としてロンドンである。

また、ハイネはメンデルスゾーンやフォンターネのようにスコットランドへ足を延ばすこともなかった。

## 3. ロンドン

年譜によれば、ハイネは1827年4月にロンドンに到着した。住んだ場所はクレイヴン・ストリートである。因みにヴェールトが滞在したのは「ストランドに接する脇道」ノーフォーク・ストリートである[21]。

船上からロンドン塔の姿を見た後「私」がどのように上陸したかは作中に記されていない。そこでその様子を推測するために、ハイネの約10年後となる1836年5月のグリルパルツァーの日記を見ると、「私たちの前には橋、右には塔。私たちは陸に近づく。税関だ、ロンドン橋の横に」、「私たちは下船するのだ！定期船の一行は散り散りになる、見たところあらゆる方向に」、「私たちは到着する。税関吏たちは他の荷物で忙しい、私たちは待たねばならない」[22] となる。

第1章「テムズ川上での会話」に続く第2章の題名は「ロンドン」であり、この章にはロンドンの全体的印象、性格、イギリス人の忙しい生活、ドイツの生活の心地よさ、ロンドンの家々、通り、魅力的な店、ウェスト・エンドの様子、ロンドンに潜む貧困や悲惨等が報告されている。

章頭にはロンドンの印象が、「世界が驚く精神を持つ者に示すことができる最も注目すべきものを私は見た、私はそれを見た、そして未だに驚いている」(3-422) と記されている。旅

を終え既にドイツに戻っている「私」がなおも記憶している驚きの内容は、「家々からなるこの石の森」とその間にある「あらゆる色様々な情熱、愛、空腹、憎しみといったあらゆるおぞましい性急さを備えた生きた人間たちの顔のひしめく流れ」であった。

「哲学者をロンドンへ送りなさい、決して詩人を送ってはいけない!」(3-422)と考える「私」は哲学者と詩人の両面からロンドンを理解することができた。チープサイドの角に哲学者を立たせれば、「このあいだのライプツィヒ見本市のすべての本からよりももっと多くをここで学ぶだろう」、と「世界の鼓動」を聞いたり見たりすることができるロンドンの有益な性格が指摘されている。ロンドンを「世界の右手」、「活動的な、力強い右手」とするならば、「取引所からダウニング・ストリートに至る」通りは「世界の動脈」とみなすことができた。

フォンタンーネの「ロンドンの夏」にはチープサイドの繁栄ぶりが「何という店々、何という豊富さ、何という輝き」と記され、「イギリス人が一つの窓辺に置くものでフランス人は二つの店を作る」という機知に富んだ言葉が紹介されている[23]。

ハイネが生まれる以前の1770年4月にロンドンに到着したリヒテンベルクは既にロンドンを「この巨大な都市」[24]と呼んだ。

1844年にロンドンを訪れたフォンターネも「ロンドンは消し去ることのできない印象を私に与えた。美しさというよりもその壮大さが私を驚嘆させた」[25]と記している。

時代が大きく異なるにもかかわらず、漱石がロンドンよって与えられた印象も強烈で、「倫敦塔」には、「まるで御殿場(ごてんば)の兎(うさぎ)が急に日本橋の真中(まんなか)へ抛(ほう)り出されたような心持ちであった」[26]と記されている。

もちろんハイネも「ロンドンの壮大さ」(3-424)を予期していた。しかし、目にするのが「小さな家々ばかり」なのに驚き、むしろそれらの「一様性」と「限りない数」に強く印象付けられた。煉瓦でできたこれらの家々は「湿った空気と石炭の煙」のせいで「同じ色、つまり褐色がかったオリーブグリーン色」をしていて、「同一の建て方」であった。横幅は窓が二つないし三つであり、高さは3階で上部には「小さな赤い煙突」が付いていた。

「商売と営業の中心地」である「シティーの主要な通り」では「古めかしい建物」が新しい建物の間に混じっていて、家々の前面は「通常金色をした浮き彫り」の「長たらしい名前や数字」で屋根まで覆われていた(3-424)。ここでは商店の窓辺に並べられている「新しく美しい品々の素晴らしい眺め」に目を奪われて「家々の特徴的な単一性」は目立たない(3-424f.)。「品物自体」がもたらす大きな効果のほかに「私」は「陳列の技術、色のコントラスト、多様性」がイギリスの商店に「独自の魅力」を与えていると考えた(3-425)。「最も日常的な生活必需品でさえも驚くべき魔法の輝きで現れる」、「そうだすべてが私たちには描かれているように思われる」とされ、17世紀オランダの画家フランス・ミーリスの絵を思い出す「私」は、一方で「ただ人間たちがこれらオランダの絵画でのように楽しそうではない」と評している。彼らは「真面目腐った顔付き」で「とても楽しい玩具」を買い、彼らの「衣服の裁断と色は彼らの家々と同じく一様」であった、という。

「私」は「もっと上流の、働くことがより少ない世界の人々」(3-425)が住んでいるウェスト・エンドについても報告している。長くて幅の広い通りがあり、その付近は「すべての家々が宮殿のように大きい」。「大きな広場」も存在している。「これらすべての広場や通りのどこでもよそ者の目が、倒れかかった悲惨の小屋によって損われることはない」。至る所に見られるのは「富と高貴さ」(3-426)であった。

ウェスト・エンドの富裕な様子は、サッカレーの『虚栄の市』第21章にある「お嬢さん、あなたがウェスト・エンドで慣れているあの壮麗さと高い身分は、ラッセル・スクウェアの私どもの粗末な家では見つけられないでしょう」[27] というラッセル・スクウェアと対比された言葉からも窺える。

しかし、「辺ぴな露地や暗くじめじめした通路に押し込められて」(3-426) はいるが、「ぼろ服と涙を伴った貧困」は存在しており、「私」は繁栄の陰の部分にも目を向けた。

「ロンドンの大きな通り」を歩き、「本当の下層民地区」に踏み入らない者は「ロンドンに存在する多くの悲惨さ」を何も見ないかほんのわずかしか見ない、と総合的な現実認識の可能な「私」は指摘している (3-426)。貧困や悲惨さにも関心を寄せることのできたハイネは「しおれた胸に乳呑み児を抱えたぼろぼろの女」や多くは年老いている物乞いたちの様子を「私」に紹介させている。

## 4. オールド・ベイリー

第5章は「オールド・ベイリー」であり、ロンドンの中から特にこの建物が取り上げられ一つの章が割り当てられている。

「私」はオールド・ベイリーを訪れ、建物と裁判の様子を見物した。

「既にオールド・ベイリーという名前だけで心が恐怖でいっぱいになる」(3-439) とされるこの「大きな、黒い、不機嫌な建物」は「悲惨さと犯罪の宮殿」であり、左側の翼部が「本来のニューゲイト」であり、「刑事犯の監獄」に使われている。中央部は「正義」の女神の「祭壇」、即ち絞首台が組まれる「窓」であり、右側は「刑事裁判所」(3-439f.) であった。

門を通り抜けると、「小さな中庭」(3-440) に至る。そこには、犯罪人たちが通るのを見ようと、下層階級への共感と同情を有するハイネによって捉えられた「下層民のかす」が集まっている。その他にも犯罪人たちの「友人や敵」、「親類」、「乞食の子供たち」、「精神薄弱者たち」、「老婆たち」が立っていた。とりわけ、「その日の訴訟事件を論じている老婆たち」は「ひょっとすると裁判官や陪審員よりも多くの洞察力を持って」と記され、「私」の関心を引いている。法廷のドアの前で親しい女たちに取り囲まれて、法廷内の「きちんと知識を身に付けた弁護士」よりも上手に、裁判にかけられるウィリアムを弁護する一人の老婆を「私」は見た。

法廷内はそれ程広くなく下の階の傍聴者席はわずかで、その代り上階の両側には「とても広いギャラリー」(3-440) があり、見物人が大勢集まっていたという。

「私」は「年取った女性の門衛」(3-440) に「1シリングの心付け」を渡して、上階のギャラリーに席を確保した。「私」が裁判を見物するのは容疑者ウィリアムが有罪か無罪かを判断するために陪審員が立ち上がったところからである。

ハイネは「ロンドンの他の法廷でと同様に」(3-440) と記し、裁判官たちが身に付けているトーガ (長い上着) や「白い髪粉をつけた鬘」が紹介される。この部分の記述からハイネはオールド・ベイリー以外の法廷にも出かけたようで、学生時代に法学を学んだハイネの法廷への関心の強さが見て取れる。

作中には裁判官たちが使う「長い緑色の机」(3-440) や「堂々とした椅子」(3-441)、「陪審の男たちのための長椅子」、「原告や証人が立つための場所」、裁判官に向かい合って立つ被告人の位置等も紹介されている。更に裁判官の机の上には「緑の草本」やバラさえも置かれていたという。どうしてそうなっているのか理由は不明であるとされているが、しかし「このバラを見たとき『私』は深く心を動かされた」。「赤い燃えるようなバラ、愛と春の花がオールド・

ベイリーの恐ろしい裁判官の机の上にあったのだ！」

対象を認識する詩人ハイネの感性の鋭敏さはこの場面以外にも鮮明に現れている。

ギャラリーの見物人たちも陪審員役を演じて、かつて友人同士であった被告人ウィリアムと原告トムソンについてめいめい勝手な意見を述べていた（3-441ff.）。やがて陪審員たちが現れて有罪が宣告され、法廷から連れ出されるときウィリアムは「長い長い眼差し」（3-443）をトムソンに投げかけ、トムソンは「死の天使のように青ざめた」という。

## 5. ベッドラム、スミスフィールド、港等

「イギリス断章」の中からオールド・ベイリー以外の場所を取り出してみると、ロンドンでのハイネの関心の所在が明らかになる。

日夜働くイギリス人の忙しさを表現する個所で「港から取引所へ、取引所からストランドへ」（3-423）という言葉が用いられ、取引所については「ロンドンの取引所のアーケードの下にどの国民も指定された席を持っている」（3-427）と記されている。大学入学前に商人生活の経験を有するハイネは詩人以外にはなれなかったにもかかわらず、取引や商売について独自の鋭敏な感覚を有していた。

『虚栄の市』第49章でニューゲイトと並べて言及されている施設にベッドラム精神病院がある[28]。

この病院も「イギリス断章」の中に登場し、そこで「私」は「一人の哲学者」（3-443）と知り合いになる。彼は「私」に「人目を忍ぶような目つきと囁き声」で「害悪の根源についての多くの重要な解明」を与えてくれた。

歴史的見地を取り入れる必要性を説く彼に同意する「私」は、「親愛なる神があまりにも少ししか金銭を作り出さなかった」という事情から「世界の根本的害悪」を説明する（3-443）。前稿で扱ったように、フランス革命の影響を阻むために借金を増大させたイギリスの財政的窮乏についての滑稽さと鋭さを併せ持った言及はこの作品の重要な内容の一つである。

ハイネはスミスフィールドにも関心を寄せた。第1章の船上の会話の中で、自由に対するイギリス人、フランス人、ドイツ人の態度の違いが扱われている。そこで、「イギリス人は自由を彼の合法的な細君のように愛し、それを所有している」（3-419）、「フランス人は自由を彼の選ばれた花嫁のように愛する。彼はそれに熱中する」と「黄色い男」が語るのに対し、「祖国が見えなくなったとき、私はそれを心の中に再び見つけた」（3-420）と自由実現の後進国ではあっても祖国への強い愛着を持つ「私」は、イギリスやフランスの状況に対してドイツを擁護する。自由に対するイギリス人の態度を批判する「私」の言葉の中にスミスフィールドが登場する。

「偏屈なイギリス人は、彼の細君にうんざりすると、ひょっとしたらいつか彼女の首に綱を巻き、売却のためスミスフィールドに連れて行くかもしれない」（3-420）。首に綱を巻かれた妻が連れて行かれるとされるのがロンドンの家畜市場、スミスフィールドである。

「ロンドンのすべての広場の中でスミスフィールドほど密接に国の歴史と織り合わされた広場はない」と考えるフォンターネも、かつてプロテスタントの火刑や騎士たちの競技が行われ、姦通した妻の首に綱を巻き売りに出す場であったスミスフィールドについて記述している[29]。この広場には毎月市場に出される20000頭の羊から生じる「我慢のできない動物の匂い」が充満し、ここを訪れたフォンターネは2日間食欲を失ったという。

「カトリック教徒の解放」（3-469）やアイルランド問題を扱った第9章でもスミスフィールドが登場する。17世紀の名誉革命が「宗教的、

プロテスタント的熱心さから」(3-472) 生じたが故に、「支配しているプロテスタント教会に感謝する特別の義務」を負わされているイギリス人がなおも抱くカトリック教への恐怖の一端が、かつてスミスフィールドで行われたプロテスタント教徒の火刑と結び付けて紹介されている。「火傷をした子供は火を怖がる」という。

なお、カトリック教への恐怖の例としてハイネは更に1605年に発覚したガイ・フォークスによる火薬陰謀事件を挙げている (3-472)。未遂に終わったこの事件で処刑されたガイ・フォークスについてはロンドン塔を見物した漱石も次のように言及している。

「帰り道にまた鐘塔(しゅとう)の下を通ったら高い窓からガイフォークスが稲妻(いなずま)のような顔をちょっと出した。『今一時間早かったら……。この三本のマッチが役に立たなかったのは実に残念である』という声さえ聞えた。」[30]

イギリス国民の中にある反カトリック感情や様々な歴史的経緯にもかかわらずハイネは「イギリス断章」の中で「カトリック教徒の市民的平等」(3-470) を支持し、「アイルランドの悲惨さ」に同情を寄せる立場を取った。「アイルランドの苦しみ」のために力を尽くすことはヨーロッパ諸国民の「最も神聖な権利」であるとされている (3-476)。

イギリス人の忙しさを示すために「港から取引所へ、取引所からストランドへ」(3-423) という表現が用いられているという点には既に触れたが、その中で取り上げられている港をドックとの関係で理解するには1850年代のフォンターネの説明が便利である。彼によればロンドンのドック群は「川にある幾つかの港」と称するのが最も適切であり、カタリーネンドック、ロンドンドック、西インドドック、東インドドックに区別され、テムズ左岸にあったという[31]。

どのドックであるかは自ずから明らかであるが、「私」はロンドンの港へ行き、ベンガルから到着したばかりの「東インド通いの船」の甲板で乗組員たちと交流した (3-480)。「その巨大な船」には沢山の「ヒンドスタン人」が乗り組んでいた。「ヨーロッパ疲れ」の状態にあった「私」は「東洋の国」との接触に「元気付けとなる喜び」を感じた。言葉は通じないけれども両者は互いに好感を持ち、「私」が「好意的な心情」を示すために手を差し出しながら「マホメット！」と叫ぶと、「その見知らぬ人々の暗い表情に突然喜び」が溢れ、返礼として「ボナパルト！」という名前が叫ばれたという (3-481)。

ウェリントンを批判しナポレオンやフランス革命を称えるハイネの姿勢はこの作品に盛り込まれた重要な内容である。

以上のように、本稿では地名や場所に即して「イギリス断章」について一層の理解を試みたが、この作品には他にキャニング、ウェリントン、スコット、コベット、ブルム等の人物に関する多彩な記述も含まれており、詩人の対象把握の深さに支えられたハイネにとってのイギリス旅行の豊かさは容易に尽きることがない。

## 註

1) ハイネの年譜的事実に関しては概ね次のものに依拠している。
Fritz Mende: *Heinrich Heine. Chronik seines Lebens und Werkes*. Berlin 1970.

2) ハイネからの引用は次の全集により、本文中に巻数と頁数を示した。
Heinrich Heine: *Werke und Briefe in zehn Bänden*. Berlin und Weimar $^{2}$1972.

3) 藤澤正明「フリードリヒ・エンゲルスと詩人ハイネ」(「世界文学」No. 105、2007.12)

4) Ludwig Börne: *Sämtliche Schriften*.

Düsseldorf/Darmstsdt 1964-1968, Bd. 2, S. 44f.

5) Georg Christoph Lichtenberg: *Schriften und Briefe*. Frankfurt am Main 1983, Bd. 4.1, S. 14f.

6) Carl Maria von Weber: *Briefe*. Frankfurt am Main 1982, S. 129.

7) Mendelssohn Bartholdy: *Briefe*. Frankfurt am Main 1984, S. 61.

8) Franz Grillparzer: *Sämtliche Werke*. München 1960-1965, Bd. 4. S. 585.

9) Theodor Fontane: *Glückliche Fahrt. Impressionen aus England und Schottland*. Berlin 2003, S. 20.

10) Ebenda, S. 20.

11) Karl Marx・Friedrich Engels: *Werke*. Diez Verlag. Berlin, Bd. 2, S. 256.

12) William Makepeace Thackeray: *Vanity Fair*. Penguin Classics 2001, S. 723.

13) Karl Philipp Moritz: *Reisen eines Deutschen in England im Jahr 1782*. München 2007, S. 8f.

14) Ebenda, S. 11.

15) Theodor Fontane: *Wanderungen durch England und Schottland*. Berlin [3]1998, Bd. 1, S. 247.

16) Fontane: *Glückliche Fahrt*, S. 20.

17)『日本文学全集 夏目漱石集（一)』集英社、昭和 41 年、S. 368.

18) Washington Irving: *The Sketch-Book of Geoffrey Crayon, Gent*. Oxford World's Classics Paperback 1998, S. 58.

19) Thackeray: *Vanity Fair*, S. 245.

20) Fontane: *Glückliche Fahrt*, S. 24.

21) Georg Weerth: *Vergessene Texte. Werkauswahl in zwei Bänden*. Köln 1975, Bd. 1, S. 213.

22) Grillparzer: *Sämtliche Werke*, Bd. 4, S. 587.

23) Fontane: *Glückliche Fahrt*, S. 119.

24) Lichtenberg: *Schriften und Briefe*, Bd. 4.1, S. 11.

25) Fontane: *Glückliche Fahrt*, S. 26.

26)『日本文学全集 夏目漱石集（一)』S. 367.

27) Thackeray: *Vanity Fair*, S. 231.

28) Ebenda, S. 568.

29) Fontane: *Wanderungen durch England und Schottland*, Bd. 1, S. 260.

30)『日本文学全集 夏目漱石集（一)』S. 380.

31) Fontane: *Glückliche Fahrt*, S. 81.

## 参考文献


1) *Heinrich Heine: Wirkungsgeschichte als Wirkungskritik*. Zusammengestellt, durchgehend kommentiert und eingeleitet von Karl Hotz. Stuttgart 1975.

2) Betz, A.: *Ästhetik und Politik. Heinrich Heines Prosa*. München 1971.

3) Brinitzer, C.: *Heinrich Heine. Roman seines Lebens*. Frankfurt am Main/Berlin/Wien 1972.

4) Futterknecht, F.: *Heinrich Heine. Ein Versuch*. Tübingen 1985.

5) Galley, E.: *Heinrich Heine*. Stuttgart [3]1971.

6) Galley, E.: *Heinrich Heine. Lebensbericht mit Bildern und Dokumenten*. Kassel 1973.

7) Hultberg, H.: *Heine. Leben, Ansichten, Bücher*. Kopenhagen 1974.

8) Leonhardt, R. W.: *Heinrich Heine. 1797-1856*. Hamburg 1972.

9) Pabel, Kl.: *Heines 》Reisebilder《*. München 1977.

10) Proelß, R.: *Heinrich Heine. Sein Lebensgang und seine Schriften*. Stuttgart 1886.

11) Sammons, J. L.: *Heinrich Heine*. Stuttgart 1991.

12) Sternberg, K.: *Heinrich Heines geistige Gestalt und Welt*. Berlin-Grunewald 1929.

13) Tonelli, G.: *Heinrich Heines politische Philosophie (1830-1845)*. Hildesheim 1975.

14) Vontin, W.: *Heinrich Heine. Lebensbild des Dichters und Kämpfers*. Berlin 1949.

15) Wadepuhl, W.: *Heinrich Heine. Sein Leben, seine Werke*. München 1977.
16) Weiß, G.: *Heines Englandaufenthalt (1827)*. In Heine-Jahrbuch 1963, Hamburg 1962.
17) Windfuhr, M.: *Heinrich Heine. Revolution und Reflexion*. Stuttgart 1969.
18) サッカレ『虚栄の市』（三宅幾三郎訳）岩波文庫